

先生のLife in JAPAN

Vol.21

■ Anna・George

・1987年生まれ。英国ノーフォーク出身。
・2010年8月から只見町英語指導助手。
・小学校と中学校で語学の指導を行います。



只見町の学校でも第2学期を迎えました。夏休みでみんながリフレッシュできたでしょうか。2学期が始まったということは、私のALTとしての職務が新たに更新されたことを表します【写真】。そして私の日本での生活が3年目を迎えました。イギリスではこの時期に新学期がスタートします。この時期になると気温はどんどん下がっていきます。只見はまだ暑さを残していますが只見で3回目のシーズンを迎える私には、この地でも今後だんだんと寒さがつのってくるのを知っています。でも、私にとってこの時期が最高に心地良いのです。現在私は「秋」を楽しみにし

ていますが、それは本当に短いものです。今年も五色沼に行ってみたいです。秋の五色沼は本当に美しいものでした。そしてもう一つ、この時期やりたいことと言えば只見の小学生に私たちの国でのさまざまなお祭りのことを教えてあげたいということです。それはハロウィン、ガイフォークスの日、感謝祭、そしてクリスマスと、ここ数カ月のうちにやってくるものです。ぜひとも世界のお祭りについて学ぶことを楽しんでほしいと思います。

私は10月に沖縄への旅行を計画しています。とても楽しみですが、沖縄は私が日本に来てからずっと「絶対行くぞ」と決めていた場所です。日本にいる間に実現できることが本場にうれしいです。日本にはまだまだ訪れて見たい場所がたくさんあります。少なくとも日本にも日本にいるうちに都道府県の半分を訪れることができたらいいなあと思います。(訳・只見 中・平野)



広報ただみ診療所

朝日診療所
医師 菅家 智史

『退院後の生活を支援する「顔の見える連携」』

朝日診療所医師の菅家です。今年の夏はとても暑かったですね。これからはあつという間に気温が下がってくると思います。季節の変わり目になると、朝日診療所でも入院患者さんが増えてくる印象があります。ということで、今回は入院診療についてのお話です。

朝日診療所には少ないながらも入院設備があり、私たち診療所医師が対応可能な状態であれば入院をおすすめしますし、他病院への入院が適切な場合にはご紹介しています。診療所の入院患者さんには高齢の方が多いので、入院治療をしているあいだに足腰が弱ってしまふ、認知症の程度が進んでしまふことも多いです。入院生活は日常生活よりも動かないですし、生活環境が突然変わることでも混乱する状態(せん妄)になってしまふこともあります。そのため、高齢の方はできるだけ入院はしない方がいい、もし入院するとしても入院期間はできるだけ短いほうが良い、と私たち診療所医師は考えています。

とはいえ、肺炎など、入院しての治療がどうしても必要な場合があります。その際には、できるだけ入院期間を短くできるように工夫しています。その一つが、介護・福祉との連携です。

入院前と退院する時では、以前できたこと

ができなくなった、など状況が変わっていることが多いです。そのまま家に帰ると生活に困ってしまいます。そこで、退院前からケアマネージャーさん(介護のサービスを調整する役割)との連絡を密にしています。入院期間が今後どれくらいなのか、その後必要なサービスは何なのかを検討し、ご家族との相談を進めてもらいます。その後ケアマネージャーさんから各サービスを調整してもらいます。このように、退院後の生活を支えられるよう、診療所職員だけでなく、他事業所の職員とも連携しているのです。

只見町の医療・介護・福祉・行政の間には、大きい自治体では実現が難しい「顔の見える連携」ができています。月2回定期的に行なっている「福祉の里勉強会」や、普段からの相談・連絡を通して、今後も町民の皆さんのお役に立てるよう、努力していきたいと思えます。

